

下さい。

答弁

(日本大) 新井 建伯

1. 子宮内圧上昇期及び極期での oxytocin 濃度は、間歇期でのそれより高い成績を得ました。しかし全例でこのような分泌様式をとるといっわけではありませんでした。

2. 母体末梢血での分泌様式は、成績の如く、ほぼ episodic ですが、その分泌機序などについてはなお speculation の域を出ておりません。今後なお検討を重ねたいと思います。

206. 産科出血の止血機構に関する臨床的並びに実験的研究

(浜松医大) 寺尾 俊彦, 川島 吉良

尾池 純子, 小林 隆夫

(名古屋大) 今井 信昭, 真鍋 修身

目的及び方法：我々はこれ迄に約100例の血液疾患を合併した妊娠を取り扱って来たが、この経験から、たとえ血液疾患による重篤な出血症状を合併していても分娩時の子宮腔内からの出血に限っては、2, 3の例外を除いて通常は、自然にしかも容易に止血する事を知った。即ち、産科出血(子宮出血)の止血機構には他科領域に見られない産科固有の止血機構が働いているものと思われる。これを明らかにするために、上記血液疾患を解析すると共に、実験的にこれを裏付けんとした。

結果：分娩時子宮出血の止血機序に重要な点は次の4点である。1. 妊娠により各血液凝固因子活性が著明に増加する(たとえ先天性凝固因子低下症でも、妊娠の進行と共に活性が著明に増加する)。2. 胎盤娩出後の破綻血管が子宮筋収縮により生物学的に結紮される(凝固因子欠損症では、子宮収縮筋の無い部位(子宮頸部、腔部など)からの出血は、どんな小さな創でも止血しないが、子宮洞筋存在部位からの出血は止血する)。3. 脱落膜、胎盤には組織トロンボプラスチンが多量に存在し、外因系血液凝固機序により止血する(内因性凝固因子欠損症でも子宮腔からの出血は止血した)。4. 胎盤には線溶阻止物質が多量に存在し、形成された血栓が溶解されない(線溶亢進例では子宮腔からも出血した)。以上4点の論拠となつた症例を紹介したい。又、上記3, 4の2点を *in vitro* にて証明した。尚、血液疾患産婦の分娩方法は、切創、裂傷を作らぬ様、緩徐な経腔分娩を行うべきとの結論を得た。

独創点：血液凝固異常を伴う分娩例の解析から、産科出血独自の止血機序を明らかにし得た。

質問

(東邦大) 木下 佐

私どもも胎盤後血中に urokinase inhibitor が多量に存在し、母体血中にも産褥初期において軽度に増量していることを発表していますが、もし母体血中の urokinase inhibitor を測定しておられたら御教示下さい。

答弁

(浜松医大) 尾池 純子

胎盤後血中及び母体血中の urokinase inhibitor の測定はいたしておりません。

尚、私達が抽出した urokinase inhibitor は、胎盤の卵膜を除去し、生食水で充分洗滌して血液除去後行いましたので、胎盤の実質そのものから産生されていると考えております。

207. CPD のレ線学的考察—特に入口撮影法による出口横径の測定について—

(千葉大) 小堀 恒雄, 飯島日出男

田巻 勇次, 高見沢裕吉

目的：CPD のレ線学的診断には、正診率を向上させるため出来るだけ多くの情報を入手する必要がある。一方、母体及び胎児への集団被曝の影響を考慮して出来るだけ被曝線量の軽減を図らねばならない。この一見相反する要請を充すため、従来等閑に付されていた、入口像に投影されている左右坐骨結節を利用して出口横径を計測し、出口撮影を省略することを意図した。

対象及び方法：基礎実験として乾燥靱帯骨盤を用いた。坐骨結節の測定点を鉛でプロットし、これのレ線像中における出現位置及び測定誤差を検討した。また、CPD を疑われてレ線撮影された頭位分娩144例について、その峽部横径と出口横径の入口撮影法及び出口撮影法による両側定値を比較検討した。なお、この中42例はCPD の診断のもとに、一部は撰取的に一部は試験分娩後に帝切分娩が施行され、3例は鉗子分娩が行われた。

成績：乾燥靱帯骨盤を用いた成績では峽部横径・出口横径共に、プロット点の計測では明かに、また規定された近似的測定点の計測では僅かながら、入口撮影法の方が誤差が少なかった。また、臨床例について、その峽部横径の両法による測定値間の相関係数は0.90であり、出口横径については0.79で何れも0.001以下の危険率で有意性が認められた。更に、CPD に関与する種々の因子について $\bar{X} \pm SD$ を求め、 $\bar{X} \pm SD$ 外の群と、それ以外の対照群の2群に分けて、その中に含まれる帝切及び鉗子例の%を検討した結果、骨盤縦径要素が横径要素に比し、より多く CPD に関与していること、また骨盤開角・移行椎も有意に影響していることが判明した。